研究論文・研究ノート・実践報告（一つを選んで他は消去）

**論文タイトル**

**English Title**

**筑波　大学 （Daigaku TSUKUBA）[[1]](#footnote-0)**

**国際　日本 （Nihon KOKUSAI）[[2]](#footnote-1)**

**要旨**

ここに400字以内で、論文の要旨を記述してください。要旨には研究の背景、仮説や主な議論、データ、分析方法と結果などを含めてください。原稿を作成する際は、不要な部分を消去しながら、この執筆様式に直接書き込んでください。その際、この文書ファイルの書式設定を変更しないでください（何か問題がある場合は、紀要編集委員会までご連絡ください）。フォント、スペース、句読点などの使い方については下記に説明する通りですが、特に注意をお願いいたします。研究論文は20,000字以内で、研究ノートは12,000字以内で作成してください。各字数には、要旨、図表や文字化資料は含みませんが、参考文献リストは含みます。

**キーワード：**キーワードを、最大5つまで書いてください

**Abstract**

Provide a summary here of no more than 150 words, which touches upon the background, hypothesis or main argument, data, methods, and results of your research. When you prepare your manuscript, you should write directly into this template, erasing the explanations. Do not change the formatting of the document (if there are issues with this, consult with the editorial committee). Take careful note of the details of how fonts, spacing, capitalization, punctuation and other elements have been used in this document; they are provided as a guide for you in preparing your manuscript. If you are writing a research article, your manuscript should be a maximum of 10,000 words; if you are writing a research note, it should be no longer than 6,000. Word counts include the bibliography, but not the abstract, tables, figures, and transcripts. Contact the editorial committee in regard to other manuscript types.

**Keywords:** Maximum 5 keywords, Second keyword, Third keyword, Fourth keyword, Fifth keyword

**１．投稿原稿の書式**

本執筆様式の書式設定は変更しないでください。書式にはフォント・サイズや行間隔などを含みます。

* 本文のフォントはメイリオ12ポイント（全角）を用いてください。
* 英文概要・キーワード・文中の英文については、メイリオ12ポイント（半角）を用いてください。これら以外のフォントの使用は認めません。イタリック体、ボールド体、下線などは、次節で述べる特別な場合を除いて使用しないでください。
* 発話の文字化では、日本語はメイリオ10ポイント（全角）、ローマ字はメイリオ10ポイント（半角）を使ってください。
* 句読点は、日本語は全角の「、」、「。」、ローマ字は半角の「,」、「.」で統一してください。
* 各段落は一字下げを行い、段落間を一行空けてください。
* 算用数字を使う際は、必ず半角英数字を利用してください。
* 上記以外の英文に関する諸注意は、英文執筆様式（English Language Template ）を必ず参照してください。

**２．本文の構成**

**２．１　節、項、項以下の分類**

原稿は節に分けて執筆してください。その際に節の見出し（タイトル）を付けてください。必要があればその下に項とその見出しを設けてください。

本執筆様式のように、節の見出しや項の見出しにはボールド体を使用してください。節と項の見出しには全角数字で番号を付け、項の場合はその後にピリオドとサブ番号と全角スペースを付けてください。

項の下により細かい分類を設ける場合には、番号を付けないでください。つまり、「**１．１．1**」のようにはしません。なお、その見出しは可能な限り短くしてください。

例）

**１．節の見出し**

**１．１　項の見出し**

**項以下の見出し（短く）**

**3．文字等の表記**

**3．1　文字化資料（文字起こし）**

発話の文字化については、イタリック体、ボールド体、下線を必要に応じて使うことができます。その際はジェファソン式の文字化方法に倣い、それ以外の方法は利用しないでください。詳しくは6節を参照してください（ジェファソン式システムについてはJefferson（2004）を参照）。

**３．2　ローマ字表記**

『国際日本研究』は日本語のローマ字表記に際して訓令式の修正版を用いています。これ以外の方式は採用しないでください。具体的には以下の通りです。

例） sh NOT sy or si: shakai, not syakai

j NOT zy or zi: jibun, not zibun; jama, not jyama/zyama

ch NOT ty or ti: chakuriku, not tyakuriku; chirigaku, not tirigaku

fu NOT hu: furo, not huro

IPA(International Phonetic Alphabet)文字を利用して言語データの音声要素を正確に表現することができます。この目的でのIPA文字の使用は、文字化資料や言語サンプルのみで許可されます。マクロンやその他の特殊文字・記号は使用しないでください。追加の母音を使用して、母音の長さを表してください。原則として、ローマ字表記は仮名の「スペル」を反映する必要があります。

例） べんとう = bentoo, not bentō or bentou

おおさま = oosama, not ōsama or ohsama

「ん」を表現する際はアルファベットの「n」を使用し、「m」は使用しないでください。「n」と次の子音の間にアポストロフィを配置しないでください。

例）manyooshuu, not man’youshuu

欧文はすべて半角文字を使用してください。たとえば「ＮＧＯ」とせずに「NGO」。中国語をローマ字で表す場合は、標準の拼音を使用してください。他の非ローマ字言語については、ローマ字で言語を表すための標準的な方法を使用してください。

長いフレーズをローマ字化する場合は、意味の単位に従ってそれらを分割してください。固有名詞の最初の文字は大文字で表記してください。

例） 大辞林 = Daijirin

研究志向 = kenkyuu shikoo

徒然草 = Tsurezuregusa

ハイフンは、地名や職位などの固有名詞に付加される要素を際立たせるために使用します。日本人の名前は、一般的に姓を先にします。

例） Ibaraki-ken

Tsukuba-shi

**3．3　その他の外国語の表記**

中国語、韓国語、ロシア語などの名称や用語については、人名、地名、文学作品など、初出の際に原語を使用することができますが、日本語標記が一般的に確立された名前や用語、都道府県、地方、主要都市、有名な地名には原語は使用しないでください。

例） 済州島

ウラジオストック

名前、用語、長いフレーズの原語を用いる際は、日本語表記のすぐ後に続けてください。日本語表記の後に全角括弧で原語を囲んでください。

例） 罪と罰（Преступление и наказание）

エピクロスの園（Le Jardin d’Épicure）

**3．4　訳語と数字**

本文中で使用されている用語の翻訳を提供する場合、対応する用語の直後の全角括弧内に訳語を記載してください。訳語は、その用語が最初に出てくる箇所にのみ記載してください。

例） лошадь（馬）

Weltrevolution（世界革命）

算用数字は半角文字を用いてください。

例） ○　2021年 ×　２０２１年

○　1字 ×　１字

**4．引用と脚注、ヘッダーについて**

脚注でなく本文中での引用を行ってください。また、同、ibid.などの表現ではなく、完全な引用を行ってください。脚注は、著者が本文中に記載したくない追加情報を提供するためにのみ使用し、書誌情報を脚注に記載しないでください。文末注は使用しないでください。

直接引用を行う際は、引用部分を「」で囲んでください。引用が2行以上にわたる際は、ブロック引用を行ってください。

文献を引用する際は、以下の基準に従ってください。

* 単著文献を引用する場合、和文文献の場合は著者の姓と出版年（半角英数字）を表記する。姓と出版年の間には半角スペースを加えない。括弧は全角を用いる。

例） 中村（1998）によれば・・・

・・・である（鈴木2002）。

単著文献を引用する場合、英文文献の場合は著者の姓と出版年（半角英数字）を表記する。姓と出版年の間には半角スペースを加える。括弧は全角を用いる。

例） Dahl（1971）によれば・・・

・・・である（Huntington 1991）。

* 引用箇所のページ番号を追加する際は、出版年の後に半角英数字のコンマ（,）と半角スペースを加えた後にページ番号を記入する。ページ範囲はnダッシュ（–）やmダッシュ（—）ではなく、半角ハイフン（-）で区切る。

例） 中村（1998, 13-15）によれば・・・

・・・である（鈴木2002, 38-43）。

* 一つの括弧内に複数の文献を引用する際は、半角のセミコロン（;）で区切った後に半角スペースを加える。日本語文献（筆頭著者の姓の五十音順）、外国語文献（筆頭著者の姓のアルファベット順）で配列する。

例）・・・である（鈴木2002; 中村1998; Dahl 1971; Huntington 1991）

* 共著論文を引用する際は、著者が2人の時には常に両方の著者名を表記する。

例） 山口・伊東（1998）によれば・・・

O’Donnell & Schmitter（1986）によれば・・・

著者が3人以上の時は、初出の際にすべての著者名を表記し、2回目以降から筆頭著者のあとに「ほか」（英語文献の場合はet al.）をつける。

例） 遠藤ほか（2006）によれば・・・

Przeworski et al.（2000）によれば・・・

* 同一著者による同一出版年の異なる文献を引用する際は、本文中に登場する順に出版年の後にa、bのようにアルファベット順に記号を入れる。

例） 中村（1998a, 1998b）によれば・・・

* 出版年が不明の場合は「n.d.」と表記する。

例） Boix（n.d.）によれば・・・

* 引用文献が近刊の場合は近刊と表記する。

　　　　例） 久保（近刊）によれば・・・

ヘッダーは、この執筆様式のように、左側に 『国際日本研究』 “JIAJS”、右側に著者の姓のみが書かれる形で統一されます。ヘッダーに名前（姓以外）や論文のタイトルなど、他の要素を追加することはしないでください。

**5．参考文献**

原稿の最後に、「参考文献」を設けて引用した文献をすべて記載してください。参考文献内でイタリック体は原則的に使用しないでください。書籍のタイトルは日本語文献の場合は『』で囲ってください。タイトルとサブタイトルを区切る際は、原著でダッシュが使われていても全角コロン（：）を使用してください。編著の際は日本語文献の場合は（編）を編者名に付記してください。外国語の文献についての記載規則は英文執筆様式（English Language Template）を参照してください。

参考文献は日本語による文献と、外国語による文献をそれぞれまとめて、日本語文献、外国語文献の順に記載してください。日本語文献は筆頭著者の姓の五十音順に配列し、外国語文献は筆頭著者の姓のアルファベット順に配列してください。ある外国語による引用文献が11件以上ある場合は、その言語による文献のみでリストを作成してください。次のような見出しをつけてください（例：中国語文献、ロシア語文献など）。

**雑誌論文**

蒲島郁夫・井出弘子（2007）「政治学とニューロ・サイエンス」『レヴァイアサン』40: 41-50.

Streeck, J. 1996. A little Ilokano grammar as it appears in interaction. Journal of Pragmatics, 26/2: 189-213.

**単行本（単著、共著）**

秋野豊（1998）『偽りの同盟：チャーチルとスターリンの間』勁草書房

Seedhouse, P. 2004. “The Interactional Architecture of the Language Classroom: A Conversation Analysis Perspective.” Blackwell.

**単行本（分担執筆）**

唐沢かおり（2020）「社会心理学から見た実験哲学」鈴木貴之（編）『実験哲学入門』第8章、勁草書房、155-175.

Keenan, E.O. and Schieffelin, B.B. 1975. Topic as a discourse notion: A study of topic in the conversations of children and adults. In C.N. Li (ed.) “Subject and Topic.” Academic Press, 335-84.

**未刊行の博士論文、修士論文、ワーキングペーパー**

小森由里（2005）『人称詞の研究 社会ネットワーク理論の観点から―和歌山県紀南地方の一親族の事例より―』［未公刊博士論文］国際基督教大学

Tarplee, C. 1993. Working on Talk: The Collaborative Shaping of Linguistic Skills within Child/Adult Interaction. Unpublished PhD dissertation, University of York.

**学会報告や講義**

内山融（2004）「日本における国家・市場関係の改革：政策アイディアの伝播と制度」日本政治学会報告ペーパー、筑波大学、2004年8月10日

Tyre, F. 2019. The role of metonymy in late Heian poetry. Paper presented at the 12th international meeting of the Society of Japanese Poetry, Tokyo University, October 22, 2019.

**インターネット資料**

国立国語研究所（2015）『複合動詞レキシコン』https://db4.ninjal.ac.jp/vvlexicon/（2021年3月25日最終アクセス）

Becker, J. 1999. The Cyberspace Regionalization Project: Simultaneously Bridging the Digital and Racial Divide. The Secretary’s Conference on Educational Technology. http://www.ed.gov/Technology/TechConf/1999/whitepapers/paper7.html#V (accessed on June 22, 2002).

**6．文字化資料、図表**

文字化資料や図表に含まれるすべてのテキストと画像、読みやすい大きさであることと十分に鮮明であることを確認してください。

**6．１　文字化資料**

二人以上によるやり取りを表す場合、ジェファソンによって確立された文字化方法を使ってください（このシステムを日本語に当てはめた例として、高木・細田・森田2016を参照）。単独的な発話あるいは作例等に関しては、その分野の慣例に従ってください。日本語以外の言語資料を提示する場合、各番号付き行の下に自然な和訳を必ず付けてください（西阪2018を参照）。やり取りのデータからの抜書を示す場合、「断片１」のように、断片＋番号を上に付けてください。単独発話やその他の事例の場合は、同様に事例＋番号を付けてください。

例（西阪2018: 44より; 一部修正あり）：

断片１

1. A: i see. now i didn’t know about det.

なるほど。そのようなこと、知りませんでした。

1. B: now.

　 さて。

1. A: [but,

　 でも、

1. B: [the point i:s,

　 要点は、

**6．２　図表**

各図表には番号を付け、その下の行にタイトルをつけ、中央付けにしてください。テキストの折り返しをしないでください。図表は１ページに収めるようにしてください。表のスタイルは原稿内で統一してください。

『国際日本研究』はオンライン紀要なので、フルカラーの画像を掲載することも可能です。しかし、読者のアクセシビリティに配慮してください。

図の例 (Bushnell 2014: 750より)：

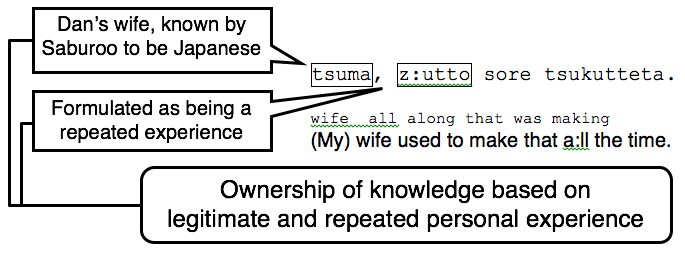


図１：知識の所有権

表の例 (Kim 2009: 342より)：

| **OPI level** | **turn-initial use** | **turn-medial use** | **turn-final use** |
| --- | --- | --- | --- |
| Advanced | kuntey | -nuntey | -nuntey |
| Intermediate | kuntey | -nuntey |  |
| Novice | kulehciman | kulehciman |  |

表１：L2韓国語話者の能力、および-nuntey/kuntey使用の分配

その他、原稿作成に関するお問い合わせは、

紀要編集委員会＜jiajs@japan.tsukuba.ac.jp＞までお願いします。

**参考文献**

Bushnell, C. 2014. On developing a systematic methodology for analyzing categories in talk-in-interaction: Sequential categorization analysis. Pragmatics 24/4: 735-756.

Jefferson, G. 2004. Glossary of transcript symbols with an introduction. In G.H. Lerner (ed.) “Conversation Analysis: Studies from the First Generation.” Benjamins, 13-31.

Kim, Y. 2009. The Korean discourse markers -nuntey and kuntey in native/non-native conversation: An acquisitional perspective. In H.t. Nguyen & G. Kasper (eds.) “Talk-in-Interaction: Multilingual Perspectives.” National Foreign Language Resource Center, 317–350.

Nguyen, H.t., and Kasper, G. 2009. “Talk-in-Interaction: Multilingual Perspectives.” National Foreign Language Resource Center.

高木智世・細田由利・森田笑（2016）『会話分析の基礎』ひつじ書房

西阪仰編訳（ブッシュネル・ケード翻訳協力）（2018）『会話分析の方法』世界思想社

1. 筑波大学人文社会系　教授。メール：tsukuba.daigaku@u.tsukuba.ac.jp. [↑](#footnote-ref-0)
2. 筑波大学人文社会ビジネス科学学術院　博士後期課程。メール：kokusai.nihon@u.tsukuba.ac.jp. [↑](#footnote-ref-1)